

中島敦「山月記」から「幸福」への展開

——パラオの伝説とチェスタトン『Orthodoxy』を手がかりに——

橋本正志

はじめに

中島敦（一九〇九～一九四二）の「山月記」⁽¹⁾「幸福」⁽²⁾には、イギリスの作家・批評家ギルバート・キース・チェスタトン（一八七四～一九三六）の評論『Orthodoxy』⁽³⁾（一九〇八）の影響が指摘できる。とくに「山月記」においては、主人公・李徴が「虎」に変身した理由として語る「生きもののさだめ」「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」などの表現をはじめ、その運命に至った現在までを語る告白文の背後に、チェスタトンの同書に展開された議論の内容の影響がみてとれることは重視されてよい。

また「夢」と「現実」の（二つの世界）を舞台に、「人間」存在のありようを相対化して描いた「幸福」の方法は、「山月記」での「人間」と「虎」との間で苦悩を深める心理への強い関心が前提となつて追究されたものである。その「山月記」と執筆時期の近い長篇「光と風と夢」の成立に際しても、中島はチェスタトンのロバート・ルイス・ステイヴンソン論『Robert Louis Stevenson』⁽⁵⁾（一九二七）の影響を受けていた可能性が指摘できる⁽⁶⁾。

このように中島作品におけるチェスタトンの影響は決して少なくない一方で、中島は自伝的作品「狼疾記」においてチェスタトンのエッセイを「楽天的」と評するなど、そこにはある種の屈折した心裏が窺

える。また「年代未詳三」〈メモの部〉でも、「○Chesterion」とチェスタトン名のインデックスを消すなど、韜晦した受容のありようがみてとれる。

いずれにしても、中島がチェスタトンに関心をもった一九三六（昭和11）年以降、比較的近い時期に構想・執筆された作品の多くに少なからぬ影響が指摘できることは間違いない。チェスタトンとの関わりは少なくとも南洋行後の「幸福」成立時にまで及ぶことから、そこには文壇登場前後の五年以上にわたる中島の文学的苦悩や葛藤がむしろ伝わってくるのである。

小論では、まず「幸福」について旧南洋群島で交流のあった民族誌家・土方久功（一九〇〇～一九七七）の研究に基づくパラオの「ブケオ・アルボーツル伝説」を確認しながら、作中の「夢」を介した登場人物の入れ替わりのモチーフと、南洋行前から継続していたチェスタトンへの強い関心との結びつきについて探っていきたい。次に南洋行前に脱稿された「山月記」についても遡って検討を加えることで、主人公・李徴の語る人間から虎への変身理由の告白に作者中島のチェスタトンからの影響感化があった可能性を指摘したい。

南洋行前後の中島作品にみられるチェスタトンの影響を分析することは、一九四〇年前後の日本統治下のパラオ社会との関わりで「山月記」「幸福」の意義を見出し、また最晩年の「弟子」「李陵」などの作

品に結実する中島文学の特質を明らかにする上でも欠かせない要目であると思われる。

一、「幸福」(一)——「ブケオ・アルボーツル伝説」との関わりから

まずは、中島の南洋パラオからの帰国後に成立した「幸福」について考えていく。中島がパラオで親交を結んだ土方久功の『パラオの神話伝説』(大和書店、一九四二年十一月)には、「パラオの勇者」という寓話物語が収められている。蔵書にも残るこの物語を、中島は「名人伝」を執筆する際に参考にしていたことはすでに論じたが、同様に「幸福」もそうした土方との親しい交流なくしては生まれなかった作品であり、中島の「南洋もの」をはじめとする帰国後の文学に与えた土方の影響力は計り知れないものがある。

この「幸福」を執筆するにあたって、中島が記したメモ書きには次のような一覧がある。

- 因果録／○第三の饗宴／○河馬／○夢男／○名人伝／○何故、
- ／○女同士の喧嘩、／同志
- カヤンガル記、／○パラオの神々、／○遠い島の「夜」話／○素朴な話、(傍線・引用者。引用文中の「」は改行を示す。以下同じ)

これらの作品の原題や内容に関するメモのうち、「夢男」「遠い島の「夜」話」については、後に「幸福」「夫婦」「雞」(総題「遠い島の話」)として浄書原稿(別稿)にまとめられた。したがって「幸福」

は、南洋からの帰国後に、第二創作集『南島譚』の出版に向けた構想過程で列記された作品(土方から提供された素材も多く活かされている)の構想時期と近い時期に執筆が開始されたものと思われる。

「幸福」は、「大支配者」とその召使いである「下男」(極めて哀れな男)が各々の「夢」を通じて双方の立場を逆転させていく物語である。「下僕」が毎夜見る夢の中で、主人たる「第一長老」に成り代わっていく顛末が描かれた「幸福」は、土方の「パラオ石神並に石製遺物報告」や「過去に於けるパラオ人の宗教と信仰」および末尾の「附」パラオに於ける信仰的新結社に就いて」などにまとめられる多くの民俗学研究に基づいていることは、これまでも度々指摘がなされてきた。

とくに、土方が現地で採集した「パラオの勇者」(後に『パラオの神話伝説』収録)の一節は、中島の「幸福」にも「下僕」の主人の家に伝えられる「投槍」の由来として語られている。すなわち「彼の家には、昔その祖先の一人がカヤンガル島を討つた時敵の大将を唯の一笑に仕留めたといふ誉れの投槍が蔵されてある」と。この一文に触れられている「祖先の一人」が「敵の大将」を討ち取ったという武勇伝は、たしかに次の土方の「パラオの勇者」後半の内容と酷似している。長くなるが、該当する部分を挙げてみたい。

話かはつて、当時ガラルツはガルホロンと戦争をして居たが、ガルホロンにはホソホルイブ(ヘルイブは鼈甲の意)と云つて体中に鼈甲が重り被うてゐて、どんな強い投槍も通すことが出来ない強い者が居たので、ガラルツは何うしても勝つことが出来なかつた。ガラルツの大酋長マツはガルボーツルにブケオ・アルボーツルと云ふ勇者のあることを聞いて、ガルボーツルに助けを求め

た。／そこでブケオはガラルツに行つた。「中略」／ガルホロンからは例の如くホソホルイブが一人出て来る。ガラルツからはブケオを出して雌雄を決せしめたが、ホソホルイブが大音声によればつて出て来る処を、ブケオは只一本の強い投槍でホソホルイブの口の中をみごとに突き貫いてしまった。そしてガラルツは戦に勝つことが出来た。／大酋長マツは非常に喜んで賞与として金でも女でも望みに任せる旨を伝へた。だが、ブケオは金も女も貰はないで此の鰐の石神を乞ひ受けてガルボーヅルに持つて帰つたのであつた。¹³⁾

この「パラオの勇者」の内容と中島の「幸福」の一節に引かれた伝説は、ともに「投槍」で敵を一突きで倒した武勇伝である点において共通している。いま仮に、「幸福」での「大支配者」の「祖先の一人」にパラオの勇者「ブケオ」が該当すると解釈した場合、中島の「幸福」の「主人」と「下僕」が「夢」を介して立場を逆転させる物語は、その前史として「ブケオ」が「ホソホルイブ」を討ち取つたパラオの伝説が踏まえられていたと考えることができよう。

ただし、土方の「パラオの勇者」は、ガルボーヅル（コレヨルコロール地方の部落名）の勇者「ブケオ」が、ガラルツ（バベルダオブ島北部の地方名で、島北端のガルホロンの南に接する）を助けるために、ガルホロン（バベルダオブ島北端の半島の地方名）の敵を討つた内容であるのに対して、中島の「幸福」は、オルワンガル島（バベルダオブ島の北にあった島）の「大支配者」の「祖先の一人」が、カヤンガル島（オルワンガル島の南にある島）を討つたエピソードとして、土方の採話とは場所、方角などが逆に変更されていることは注意を要する。

すなわち、土方の「パラオの勇者」がバベルダオブ島の南にあるコ

レヨル島からバベルダオブ島北端の敵を討つ物語であるのに対して、中島の「幸福」では、今はなき北の島（土方に拠ればカヤンガル島の「北方」にあった島で、当時「小さな砂島」¹⁴⁾となっていたオルワンガル島）から南のカヤンガル島の敵を討つ物語へと地理関係が反転され、いわば脚色されているのである。「幸福」の冒頭においては、「此の島」として舞台の島の名が伏せられていたが、末尾において初めて「オルワンガル島」を舞台にしていたことが明かされている。おそらく中島は、土方の採集物語「パラオの勇者」を念頭に、その内容を踏まえながら、帰国後に「幸福」を執筆する過程で土方の原話と同様の舞台となることを避けて虚構化したのではないだろうか。後述するが、こうした創作において生じた中島の作意は、多分に「幸福」で追究された主題とも深く関わっていると思われる。

また、上掲の「ブケオ・アルボーヅル伝説」に関連して確認しておきたい「投槍」の由来がある。土方は「過去に於けるパラオ人の宗教と信仰」において、「槍」について次のような一節を記している。

それから今一つ変わったものでは、ガラルツのドシヨゴン部落の廃址に行きました時に、只一軒だけア・イルと云う家が残り居りましたが、其の家の中には「中略」大きな一木製の槍がありました。是れについては説明を聞くことが出来ませんでした。ゴレヨルのガルボーヅルにも昔此の様な大きな槍があつたと云います。ガルボーヅル廃址に只一人踏止まって居た、元酋長のイケツ老人の言によれば既記ブケオ・アルボーヅルがガラルツにたのまれて、ガルゴロンのゴソゴルイブを突き殺した槍であつたと云い、丸太の様に太いものであつたと云います。またイベヅールも、此の槍を見知つて居るが檳榔樹位の太さがあつたと云い、猶

此の槍はゴソゴレイブの口の中を突いたので歯のあとがざざざざついで居たと云います。これはスペイン人が持つて行ってしまつたとのことでありませんが、丁度此のドシヨゴンのものと同じであつたと思われま⁽¹⁵⁾す。

さらに、同じく土方の「パラオ石神並に石製遺物報告」の中では、私が行きました頃は、ガルボーツルは既に全く廃村同様になつて居て、只一軒の家があつて、其処にこの部落の昔の酋長イケツ老人が病軀を横たえて止まり住んで居りました。／＼イケツの伝承によれば、此の石の在る処はガツツプユグと云われ、この石はもとガラルツにあつたものを、次の様な次第で此の村に持つて来られたと云います。⁽¹⁶⁾

と褒美の「石」についても説明され、両資料に「ブケオ」が「槍」で「ホソホルイブ」を倒したという「ブケオ・アルボーツル伝説」について語る「イケツ老人」の様子（病状）もあわせて紹介されている。また「近代パラオの王様とも云うべき大酋長」の「イベツール」（「個名テムと云う当時七十余歳の老人」だったという）の証言に基づく「注」として、「ブケオがゴソゴレイブを打殺したのはこの石神の導きによつたので、それでブケオはこの石神を乞うて来たのだと云う」とも記されており、スペイン領有以降、日本も含む列強支配の歴史において、以前の勢力を失つた元「酋長」の現在の姿とともに、彼らが語るかつてのパラオの武功や権勢についての伝承が土方の民俗学研究によつて採集・記録されていることを重視するものである。これらの土方の研究成果を踏まえて中島の「幸福」が構想・執筆された可能性も

あることを、あらためて確認しておきたい。

二、「幸福」(二) —— 「モ・バツ」による「仕合せな夢」

さて、中島は「ノート第五」に「石モ・バツになる(寐る)⁽¹⁸⁾」とのメモを残しており、一九四二(昭17)年三月半ばにパラオより帰国する前から土方の民俗学研究に直接触れていたことが窺える。以下に、中島が参考にしたと思われる土方の研究内容を引いてみたい。

モ バツ(ボ バツ)はパラオ語では寝ることを意味するのであります。寝ることを石になると云い、死ぬときは石になつて其の魂が天に昇ると云うのでありまして、人間が寝て居る間は我々の魂は我々の肉体からぬけ出して歩きまわつて居ると云う考え方は、未開人の多くに通じる考えであり、その魂が肉体からぬけ出たきりで遂に帰つて来なくなると、それが我々の「死」であるのですから、斯う云うところを見るとパラオ人の間には、人間が死ぬと石になると云う様な俗信があつたものではないかとも考えられるのであります。⁽¹⁹⁾

また、中島の同じメモには、「テイヤカ・ガイヌ」とあるが(ガイヌは「出来ごと、噂⁽²⁰⁾」の意)、やはり土方の「過去に於けるパラオ人の宗教と信仰」の次の内容に拠つたものであろう。

パラオ人は誠に見え坊で話好きで、二人三人道で出逢えば直ちに腰を下してあることないことを話しはじめます。他村の者が来

れば第一番に聞くことは「デイヤカ ガイス」(ニュースはないかね)と云うことであります。⁽²¹⁾

そして注目すべきは、これらの土方の研究に関連して、噂話の具体例とともに、次のような説明が加えられていることである。

そこで一人の気の小さな土人が何かの状態で精神に異常を呈する。そしてたまたま自分が平素恐れて居る悪霊悪神になった様に錯覚する——酒を飲んだ場合とか精神に異常を来たした場合などに平素の其人と正反対な性質を現わす様な例は随分多いものです⁽²²⁾

後半で詳述するが、南洋行の直前に人間から虎への変身に至る「性情」を描いた「山月記」のテーマとも繋がる〈人間の二面性〉への関心が、こうした土方の民俗学研究成果とも結びつく形で、そのまま南洋行後の「幸福」構想・執筆時期にまで持続していた可能性が指摘できよう。こうした関心の基底には——すでにチェスタトンが『Orthodoxy』や「この世界」は「実に不思議な驚くべき世界」であり、「今とはまったく別様になっていたかもしれない世界」⁽²³⁾であると主張し、「この世界」を相対化する視点の重要性を提唱していたように——南洋行以前のチェスタトンの繙読による影響が「幸福」の執筆に際しても存在していたように思われる。

いずれにしても、チェスタトンは『Orthodoxy』において「人間を正気に保つものはいったい何か」という問いに「二つの真実」(The two truths)をキーワードに用いて、次のような「回答」を出している (II. The Maniac, pp.48-49)。

現実の人間の歴史を通じて、人間を正気に保ってきたものは何であるのか。神秘主義なのである。心に神秘を持っているかぎり、人間は健康であることができる。神秘を破壊する時、すなわち狂気が創られる。「中略」かりに真実が二つ存在し、お互いに矛盾するように思えた場合でも、矛盾もひっくり返るめて二つの真実をそのまま受け入れてきたのである。「中略」二つのちがった物の姿が同時に見えていて、それでそれだけよけいに物がよく見えるのだ。こうして彼は、運命というものがあると信じながら、同時に自由意思というものもあることを信じてきたのである。「中略」このように、一見矛盾するものを互いに釣り合わせてきたからこそ、健康な人間は晴れ晴れと世を送ることができたのである。「中略」つまり、人間は、理解しえないものの力を借りることで、はじめてあらゆるものを理解することができるのだ。⁽²⁴⁾

他にも、中島の「ノート第五」には「恐しい」^(マダック)とのメモがあり(この「恐れ」については、総題〈南島譚〉の中的一篇「雞」にも土方の研究が下敷きとして用いられている)⁽²⁵⁾、土方の「過去に於けるパラオ人の宗教と信仰」に言及されていることから、明らかに中島は南洋行後の作品において土方の研究を参照していたと考えられる。

一体、未開人の間には此の「恐れ」の観念が非常に大きいと思われます。パラオばかりではなく、ヤップ、トラックの離島あたりの者でも、彼等の通常の話の中に此の「恐ろしい」と云う言葉が実に多く聞かれるのであります。⁽²⁶⁾

おそらく中島は土方との親しい交流の過程で、主に「過去に於ける

パラオ人の宗教と信仰」や、その末尾の「附」パラオに於ける信仰的新結社に就いて」などの内容（研究ノートなどを含む）に直接触れる機会があったのではないか。南洋行前に脱稿された「山月記」などにみえる、チェスタトンの影響を受けながら人間の運命に対する「恐れ」や矛盾する心理、存在の不確かさ、また理解し得ないものに向き合うのかといった根本的な問いが南洋行後の作品においても潜在し、かつ土方の民俗学研究の内容も取り込みながら深まりを獲得していく過程がみてとれる。こうした特質は、晩年に成立する中島作品の基底となり、南洋行後の中島文学に新たな展開をもたらしたのではないだろうか。

三、「山月記」(一)——狂気としての理性とその象徴としての「月光」

ところで、「幸福」は中国古典『列子』のみならず、パスカル「パンセ」を典拠として執筆された作品である。また先述の通り、パラオでの親しい交友関係の中で得られた土方の民俗学研究やエピソードに加えてチェスタトンの『Orthodoxy』の内容にも拠りながら、それらを組み合わせて成立していると思われる。

たとえば、中島は「山月記」の中で「時に、残月、光冷やかに」「既に白く光を失つた月」など、素材「人虎伝」にはない「月」とその「光」の描写を幾度も登場させている。こうした「山月記」に描かれた「月」に関する表現にも、チェスタトンの『Orthodoxy』からの影響があったのではないか。本節では、こうした「山月記」における「月」(の「光」)の描写について、チェスタトンの〈二つの世界〉の考え方をもとに考えていきたい。

チェスタトンは『Orthodoxy』の中で、太陽神とされる「アポロ」を「想像力の神ばかりでなく正気の神」とし、また「詩の神であるだけがなく、また治癒の守り神でもあった」と解釈している。その一方で、「月(光)」に関しては次のように述べている(II, pp.50-51)。

論理万能の主和主義は、「中略」月光と言うことができるだろう。月光のごとく冷やかに実体がない。光は見えても熱がない。それにまた、死の世界から反射されてくるかりそめの光にすぎぬ。「中略」というのも月は完璧に理性的であるからだ。そして月はいつも狂気の生みの親なのである。古来、狂気を、月の引き起こす病いと言いならわすのは、けだし古人の知恵の伝えるところと言うべきであろう。(「二」四一頁)

右の引用のように、「月」とはまったく「理性」(utterly reasonable)の象徴であり、ひいては「狂気の生みの親」(the mother of lunatics)でもある、とするチェスタトンの「月」理解に対する共感が「山月記」執筆時の中島の筆致からみてとれるのではないか。また、チェスタトンは次のようにとりわけ「精神に異常をきたしている人間」について、その独自の見解を披瀝している部分があり(II, pp.31-32)、中島は「山月記」執筆にあたって参考としていた可能性がある。

多少にかかわらず精神に異常をきたしている人間と話した経験がある人なら「中略」、誰でも思い当たるはずである。彼らのいちはん不気味なところは、身の毛もよだつほど話の細部が明確だということだ。彼らの頭の中の地図では、一つ一つの事柄がこと細かく、実に入念に結びつけられていて、とても迷路などの比では

ない。「中略」健全な判断には、さまざまの手かせ足かせがつきまとう。しかし狂人の精神はそんなものにはお構いなしだから、それだけすばやく疾走できるのだ。ヒューマナーの感覚とか、相手にたいするいたわりだとか、あるいは経験の無言の重みなどにわずらわされることはない。狂人は正気の人間の感情や愛憎を失っているから、それだけ論理的でありうるのである。(二二二三頁)

中島は実際に、右の引用部に続く一節から「狂人とは理性以外のあらゆる物を失った人である」(二二三頁)との原文を抜粋していることを重視してみたい(ノート第十一)。こうした中島の強い関心を踏まえるならば、「山月記」の「月」の描写はチェスタトンの『Orthodoxy』に展開された「月」に関わる考察と無関係であるとはいえない。すなわち、「山月記」の「月」に向つて咆えた²⁸などの描写は、(まったき「理性」のみとなり)「正気の人間の感情や愛憎」を失った人をむしろ「狂人」とするチェスタトンの解釈に基づけば、やがてその「狂気」としての理性すら失い、姿形も内面も完全に異類としての虎へと化していく運命にある李徴の姿が中島の構思にはあり、それが「山月記」の「月」表現の背景にはあつたと解釈できよう。

たとえば、「山月記」の「既に白く光を失つた月」との表現は、繰り返せば「月」を完璧な理性の象徴として、むしろ「狂気」を生み出すものと捉えるチェスタトンの解釈に基づけば、その狂気としての理性すら失つた虎の姿の隠喩でもある。このように「山月記」において、とくに「月」の「光」は理性の残存の象徴として捉え直すこともでき、「月」の「光」が完全に失われることは、理性を失うこと(狂気も含めた人間としての内面を失い、動物としての虎へと完全に成り変わること)が暗示されていると考えることもできよう。それまでの「月」

の「光」の中で自らの「所業」などを分析的に語る李徴の声は、理性を有する人間としての自身の「滅び」の恐れ²⁹を強く描くための素地でもあつたのである。

また「山月記」本文での「さだめ」「人間」「しあはせ」「しるし」といった傍点は、執筆時に中島が関心をもつたチェスタトンの原書における表現を念頭に付された可能性も指摘したい。たとえば「しるし」に付された傍点については、次に示す通り、原文では「mark」と斜体で強調されており(ただし、訳書では単に「兆候」とある)、作中の傍点がチェスタトンの原文の表記を踏まえて付されたものである可能性もあると思われる。

.. we may say that the strongest and most unmistakable mark of madness is this combination between a logical completeness and a spiritual contraction. (II, p.33)

狂気の最大にして見まごうかたなき兆候は、完璧の論理性と精神の偏狭とがかく結合していることにあると言えよう。(二二二五頁)

ちなみに「山月記」には「天に躍り地に伏して嘆いても」という対句的な表現があるが(直接は素材「人虎伝」に「躍りて天を呼び俛して地に泣く」²⁹とある表現に拠る)、図らずも『Orthodoxy』の「It is not earth that judges heaven, but heaven that judges earth. .. (IV. The Ethics of Eliland, p.87)」(「天を裁くのは地ではなく、むしろ地を裁くのが天である」³⁰)といったチェスタトンならではの対句表現と似ているのは興味深い。対句を多用する両者の表現の共通点がみてとれるのである。

同様に「しあはせ」についても、チェスタトンの『Robert Louis Stevenson』での一節に基づいて解釈することができるのではないか。

He had his answer to the question, 'Can a man be happy?'; and it was, 'Yes, before he grows to be a man.' (Chapter X. THE MORAL OF STEVENSON, p.234)

ステイヴンソンは「人は幸せになりうるか」という問いにたいする自分なりの答えをもっていた。その答えは——「なりうる。大人にならないうち^は」。

このように「山月記」における「己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだらう」といった「虎」へと完全に変身すれば「人間の心」を失ってしまうことへの「恐れ」が表現された一節は、以下の『Robert Louis Stevenson』で示された「幸せ」に関する議論 (X, p.234) に用いられたレトリックとも重なっている。

人間は、幸せの追及の過程で真剣に幸せを思い描こうと立ち止まると、いつも「原始的な」幸せ像とでもよべるようなものを思い描いてきた。人間は複雑さに走るが、単純さを切望している。王様になろうとするが、羊飼いになることを夢見る。(「十一」一六八頁)

こうした中島の人間における「幸福」とは何かという問いは、一九三六年以降のチェスタトンへの関心と重なって、同時期に構想・執筆された作品に遍在している。チェスタトンはステイヴンソンについ

て「基本的なものへの回帰と単純化の感覚」が明確に窺われ、その「幸せについての白昼夢は、昼間よりむしろ夜明けと関係がある」(「十」一六八頁)と解釈しているが、これらの理解にも影響を受けながら、中島は「山月記」において「夜明け」とともに完全に異類へと変身を遂げる結末と、そうした運命を予感した李徴の声の葛藤、すなわち「性情」などとの関わりで人間とは何かをめぐって苦悩する心裏を描き出していたのではないだろうか。

四、「山月記」(二)——「欠ける所」の典拠をめぐって

成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何処か(非常に微妙な点に於て)欠ける所があるのではないかと。／＼旧詩を吐き終つた李徴の声は、突然調子を変へ、自らを嘲るが如くに言つた。／＼羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たはつて見る夢にだよ。嗤つて呉れ。詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男を。(袁^{えん} 袁^{えん}は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてみた。)

この「山月記」の李徴の「旧詩」に「欠ける所」についても、先のチェスタトンの『Orthodoxy』の内容との関わりが指摘できるのではないか。同書での「ヒューマーの感覚」を失い、「正気の人間の感情や愛憎を失っている」と表現された一文や、以下に列挙する中島が実

際に抜粋した一文(「ノート第十一」)の直前の文脈も考慮するならば、執筆時の中島の関心の在処は明らかであろう。すなわち「山月記」の成立過程を踏まえた読解をするならば、いわゆる〈人間性の欠如〉を重視し、そこに解釈の力点を置く読みもあながち否定し去ることはできないと思われる。「山月記」執筆にあたり、実際に中島が目を通した可能性のある『Orthodoxy』の一節を、以下に列挙してみたい。

... he is commonly a reasoner, frequently a successful reasoner. ...
 He is in the clean and well-lit prison of one idea: he is sharpened to one painful point. He is without healthy hesitation and healthy complexity. (II, pp.37-38)

概して狂人は論理家であり、しかも優秀な理論家であることがきわめて多い。「中略」狂人はたった一つの観念のとりことなっている。その牢獄は清潔無比、理性によってあかあかと照明されてはいるけれども、それが牢獄であることには変わりがない。彼の意識は痛ましくも鋭敏にとぎすまされている。健康人の持つ躊躇も、健康人の持つ曖昧さも、彼にはまったく欠けているのだ。(「二」二八～二九頁)

But the materialist is not allowed to admit into his spotless machine the slightest speck of spiritualism or miracle. (II, p.41)
 しかし唯物論者にとっては、完璧に磨き上げられた機械のごとき彼らの宇宙に、ほんの一かけらの精神性も奇蹟も受け入れる自由はない。(「二」三三頁)

The sane man knows that he has a touch of the beast, a touch of

the devil, a touch of the saint, a touch of the citizen. Nay, the really sane man knows that he has a touch of the madman. (II, p.42)
 正気な人間ならみな知っている。自分の中には動物的な一面があり、悪魔的な一面があり、聖者の一面があり、そして市民としての一面がある。いや、その男が本当に正気なら、自分の中には狂人の一面さえあることを知っているはずだ。(「二」三三頁)

長い引用となったが、これらのチェスタトンの主張に対する当時の中島の関心を重視すれば、「山月記」において虎になってからの李徴の苦しみと、彼の詩を通じて「欠ける所」を指摘する袁儻の批評が描かれた背景には、彼ら二人の〈差〉において、やはり李徴を相対的に捉える作者の創意が作品執筆の前提としてあったと指摘せざるを得ない。したがって、作品の背後で「自己批評」の眼を光らせている作者の存在」をみてとり、「いわば、この作品は、作者中島の〈内面劇〉の様相すら呈している」と読んだ木村一信氏の指摘は、「山月記」の生成過程を重視した読解においては、むしろ正鵠を射ているのではないだろうか(ちなみに「山月記」が執筆された時期は概ねチェスタトンの『Robert Louis Stevenson』を参照しながら「光と風と夢」に取り組んでいた時期とも重なっており、ここでも主人公・ステイヴンソン自ら「欠陥」や「限界」に苦しみ内省が描かれていることから、この時期の中島の関心に沿った一連の文学的営為がみてとれよう)。

いずれにしても、中島がチェスタトンの思想に強い影響を受けていたことを踏まえると、「山月記」は「完璧に磨き上げられた機械のごとき」理性のみに立脚する「唯物論」的な考え方(II, pp.34-35)に憑かれた知識人の姿と末路を諷刺した小説としても読むことができよう。

われわれが唯物論者の結論に反対するのも、やはりこの結論が、正しいか正しくないかは別として、当人の人間性を次第に破壊して行くという事実のためにはかならない。単にやさしさといった意味で人間性と言うのではない。希望と、勇氣と、詩と、自発性と、あらゆる人間的なるものの意味で言うのである。(「二二三」三四頁)

こうした中島の作品から見出せるチェスタトンの影響は、「山月記」と近い時期に執筆された「狼疾記」の一節「我々の価値判断の標準を絶対だと考へるのは、我々の自惚に過ぎないのではないか」とも関連していることは偶然ではない。一九三六年以降の中島文学に及んでいたチェスタトンの影響の程度を示す証左であるとともに、当時の中島文学の主題そのものでもあったのである。

以上のように、チェスタトンの強い影響の下で執筆された「山月記」は、官僚としても、詩人そして人間としても脱落し、虎として社会から消え去っていく李徴の姿と、社会の成功者で温和な常識人である袁倬の姿を対比させるように浮かび上がらせ、その「二つの真実」を示そうとした物語だったのではなからうか。その意味において、李徴の「旧詩」に「欠ける所」を指摘し、目の前で起こった「超自然的の怪異」を受け入れる袁倬の態度は、チェスタトンとの関わりで「山月記」が執筆されたと解釈する場合においては、十分理解することができるのである(別稿に論じたが、「吾々が了解しない事を話す、超自然的な物語りを信ずるのをもつと自然でありますぢや」との「師父ブラウン」の言葉とも関連していよう)。

したがって、「山月記」は李徴と袁倬の両者が不可欠な構造において成立しており、虎としての李徴と温和な常識人としての袁倬を相補

的に描いたことは、中島のチェスタトン受容のあり方を象徴するものとして見逃せない。中島の「山月記」は、素材「人虎伝」の世界観を用いながら、かつチェスタトンの思想にも拠りながら、李徴と袁倬という対照的な人物の造型を通して、一つの世界に囚われない人間存在のありよう(あるいは作者中島の対象の見え方)を浮かび上がらせた物語であり、そこにはチェスタトンの強い影響が指摘できるのである。

五、「山月記」から「幸福」へ——パラオ統一の夢と現実と

叙上の「山月記」におけるチェスタトン受容は、やがて中島が南洋から帰った後に執筆する「幸福」の世界においても、同時代社会との関わりの中でさまざまに顕在化していくことになる。この南洋行後の「自己の経験の対象化」の視点から、いま一度「幸福」の世界を眺めてみたい。

中島の「ノート第四」には「幸福」「夫婦」の下書きがあるが、その末尾の「消化薬」との走り書きに着目する。「幸福」本文にも「病氣」の治療に「アマアカ樹の芽」や「蝟樹オオコルの根」を煎じて飲んだとの記述があることから、おそらく土方の研究に基づいていると思われる。土方は当時パラオの人々の信仰を集めていた新興の宗教結社「ガラ・メデクゲイ」の活動の一環として「結社員間に唯一の奉仕事業として施薬をして居ります」と記し、「漢方式な草根木皮等の医療法が研究蒐集されて」いると述べている。その「薬法」が「ガラ・メデクゲイの布教」の「大きな助力」となっており、「かなり成功しても居る」一例として、実際に「イロブグ」というリウマチに症状の似た病に罹っていた先の「イケツ老人」のエピソードを紹介している。長く

なるが、以下に挙げてみたい。

ガルボーヅヲ廢村に只一人ふみ止まっていた旧酋長のイケツ老人は、私が尋ねまして当時は家の中の一隅に病軀を横たえて居って一歩も家の外に出ることも叶わず、脚腰が全然癱れ衰えてしまつて居て体を起すことも出来ず、屋根下から頭の上に一本の綱をつるし、手で其の綱をたぐつて身を起すより外全く身動きを失つて居つたのでありました。「中略」然るに私が其後方々を歩きまわつてア・イライのグルルオーブルに行きました時、一人の老人が非常に喜んで私を迎えてくれましたが、彼が独眼なので「中略」直ちにイケツ老人であることを知りましたと同時に、再び疑わざるを得なかつたのであります。八年余の間を日の目も見ずに床の上に横たわつたきり用便にさえ出られなかつたイケツが、どうしてここに黒々と日に焼けて彼の足で歩いて私を迎える事が有り得ようか。併しそれは確かにイケツでありました。彼の言に依れば彼はガラ・メデクゲイの者から前記イロブグの治療をうけたのであります。そして彼も亦動くことのないガラ・メデクゲイの信者になつたのであります。彼は足かけ九年の面壁の如き生活から抜け出してカヌーに棹さして魚取りにさえ行くのであります。薬法も亦相当効果があるとしても、信仰の助がなかつたならば此の様に速やかには癒らなかつたのであります。⁽³⁷⁾

こうした「ガラ・メデクゲイ」による医療行為の著しい効果や実績を背景としながら、病に苦しむ人々の治癒と恢復が現実のものとしてあつたケースを、おそらく土方を介して中島も見聞きしていたのではないか。もちろん「幸福」を土方の著作に基づいて解釈することは注

意を要するが、これらと中島がまったく無関係であつたとは言いつれない。少なくとも「ノート第四」の末尾には、先の「消化薬」と同じ筆跡で「幸福ナ男」「転世、生、」（『中島敦全集3』二七〇頁）とのメモがあることから、「幸福」執筆に際して周囲の環境の変化や人間の生まれ変わりそのものをテーマに追究しようとしていたことは間違いないものと思われる。

さらに土方は、「ガラ・メデクゲイ」の頭目の一人「コーデツプ」とも親しかつたといひ、そのパラオ全島「統一」の方法について、「ケセケス」というパラオの天地創成神話に登場する神々への「讃歌」が用いられていたことを例に挙げて説明している。

ちぐはぐな神話伝説に或る体系を持たせて、従来地方的或は各部落間に別々に語られ区々に別れていた神々の間に統制をつけて、全パラオに適合し得るようになしよとする努力が払われ、而して此の實際方面に於ては大いに成功したと云うてよく、今や北ンカヤンガルの果から南ベリリヨウ、ゲヤウルに至る迄完全に此のガラ・メデクゲイによつて統一せられ、不審不服をいなく者がなくようになつて居るのであります。⁽³⁸⁾

そして最後に、次のような「讃歌」が紹介されていることは重要であろう。すなわち、

而して更に転身して／ガルミヅの支配者となられた時／人々はツケヨツク・イミツとお呼びした／そしてガルボーヅルに行かれると／人々はブケオ・アルボーヅルとお呼びしたが／其故は大伯神なるデルボンのゴソゴレイブ神の口を突き貫かれたからである。

(後略)

とパラオ「統一」の求心力として「ブケオ・アルボーツル伝説」に基づく「神々の同根転身の教義」が歌われていたことが指摘されているのである。「古英雄の再来」として「幸福」の「下僕」が夢の中で「神々しさ」を獲得していく場面が自ずと連想されよう。

ブケオ・アルボーツルはガルボーツルの部落神で、ガラルツを助けてガルゴロンのゴソゴレイブを突き殺した勇者であります（ブケオ・アルボーツル伝説参照）。／斯ういう風にして地方地方にちぐはぐに伝えられている沢山の神々を本元的な少数な神に統制して、地方地方の神々を其のまま生かし乍ら、しかも全パラオの神を其の上に立てようというのであります。⁽⁴⁰⁾

これらの土方の民俗学資料を踏まえた上で、あらためて「幸福」を解釈するならば、中島は「ガラ・メデクゲイ」によるパラオ統一運動において、教義上の要となる「ブケオ・アルボーツル伝説」を自らの作品世界に組み込むことで、いわば「幸福」における（二つの世界）の存在と、そこでの「世界の転倒」⁽⁴¹⁾や「主人と奴隷の逆転」⁽⁴²⁾のモチーフを通じて、「あり得たかもしれない現実」⁽⁴³⁾であるパラオの列強支配からの独立、すなわちパラオ再興の夢を物語全体として提示しようとした可能性が指摘できるのではないか。そして当時の「ガラ・メデクゲイ」による運動は、土方が『サテワヌ鳥民話』の「あとがき」の中で指摘した、サテワヌ鳥の文化と比較したパラオ社会の傾向や特質と神話伝説の位置付けも背景に実践されていたと思われる。

すなわちパラオにおいては酋長制度が厳然としており、メーター（身分ある者）とヘーブル（賤しき者）との差が判然と日常生活における権利義務の形をなし、尊敬・卑下の感情乃至慣習が守られて、みだりに犯すことが出来ない一方、部落対部落、地方対地方の間にも、戦争等による精力の消長がはなはだしく、互いの間の対立感情がきびしかった。これがひいては、出生による故人の格、家の格、部落の格、地方の格をさえ誇るような傾向を導き出し、神話伝説を無上なものに作りあげていったのではなかったか。⁽⁴⁴⁾

おそらく中島は、南洋での土方との交遊の過程で、土方からかつて「酋長」だった「イケツ老人」などに関わるエピソードを聞く機会があり、そうした自身のパラオ体験をもとに、帰国後に「ブケオ・アルボーツル伝説」を前史とする「幸福」の世界を今に描き出したのではなからうか。すなわち、中島は南洋行前から繙読していたパスカルの『パンセ』や、家学として親しんでいた中国古典『列子』を直接の素材としながら、またチェスタトンの『Orthodoxy』も参照し、さらにパラオでの土方との深交において見聞したパラオの歴史文化や宗教、社会性も背景に（何よりもその皮肉に満ちたチェスタトン流の結末も含めて）、一切を相対化する独自の「幸福」の世界を織り上げたのではなからうか。

以上のように、中島の「幸福」が構想・執筆された背景には、日本統治下における反日運動としての性格もあった「ガラ・メデクゲイ」とパラオの「ブケオ・アルボーツル伝説」との関わりが明らかに認められる。「幸福」での主従関係の（入れ替わり）のモチーフは、一九四〇年前後のパラオ社会を背景に、神話伝説の世界を現在に「転世」

させる（もう一つの世界）の可能性を前提として描かれていた。中島の南洋行前後における文学的営為——「山月記」から「幸福」への展開とその様相が明らかになるとともに、そこには「二つの真実」を提唱したチェスタトンの中島文学に与えた影響の大きさがあらためて指摘できるのである。

おわりに

中島敦がチェスタトンの『Orthodoxy』に関心をもった一九三六年以降、とりわけ「山月記」に描かれた〈二つの世界〉のテーマは、やがて南洋行後に土方久功の民俗学研究に触発される形で、パラオの「ブケオ・アルボーツル伝説」などの世界観を取り込んでいった。「幸福」には、南洋行によってもたらされた中島の文学世界の広がりと言学表現の深まりの過程がみとれる。中島の帰国後における「南洋もの」と総称される作品世界は、中国古典のみならず、チェスタトンへの持続的な関心を前提に英文学や南洋の神話伝説への強い関心のもとで結実したものであった。中国古典に対する素養を基盤としながら、自らの文学を新たに開花させていったのである。

とくにチェスタトンからの影響は、「かめれおん日記」「狼疾記」以降の多くの作品に及んでいる。中島はチェスタトンの『Orthodoxy』を通じて、異なる世界観を前程とした人間存在のありように関心を向け、同書の内容や表現を直接自らの作品執筆の際に活かしていった。一九三六年から一九四二年までの五年以上にわたる中島のチェスタトンへの強い関心は、蓋し中島文学におけるチェスタトンの重要性を示している。引き続き、南洋行前後の中島文学にみられるチェスタトンの影響について考察していきたい。

付記

中島敦の文章の底本は、『中島敦全集』全三巻（筑摩書房、二〇〇一年十月、二〇〇一年十二月、二〇〇二年二月）とし、引用は全てこれに拠った。引用の際は、原則としてルビ・傍点・旧仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字へ改めた。

註

- (1) 『文學界』第九卷第二号（一九四二年二月）に、「文字禍」とともに「古譚」の総題で発表された。
- (2) 単行本『南島譚』（新鋭文学選集2）（今日の問題社、一九四二年十一月）に収録され、初めて発表された。
- (3) G.K.Chesterton, *Orthodoxy* (New York: Dodd, Mead & Company, 1908), 111) の引用は一九二四年の版に拠った。なお、本書の訳文には安西徹雄氏の訳を引用し、参照させていただいた（G・K・チェスタトン著／安西徹雄訳『正統とは何か』（新版）春秋社、二〇一九年四月）。
- (4) 拙稿「中島敦のG・K・チェスタトン受容——「山月記」「幸福」と『Orthodoxy』との比較から」（『別府大学紀要』第六十三号、二〇二二年二月）参照。
- (5) G.K.Chesterton, *Robert Louis Stevenson* (London: Hodder and Stoughton, n.d.) 引用はすべて一九二七年刊の初版に拠った。なお、本書の訳文には別宮貞徳・柴田裕之両氏の訳を引用し、参照させていただいた（ロバート・ルイス・ステイヴンソン／別宮貞徳・柴田裕之訳『G・K・チェスタトン著作集（評伝篇）5 ロバート・ルイス・ステイヴンソン』所収、春秋社、一九九一年十一月）。
- (6) 拙稿「中島敦「光と風と夢」論——G・K・チェスタトン『Robert Louis Stevenson』との比較から」（『別府大学紀要』第六十四号、二〇二三年二月）参照。
- (7) 『年代末詳三』（メモの部）（筑摩書房版第三次『中島敦全集3』所収、筑摩書房、二〇〇二年二月）四五八頁。網掛けは抹消を示す。
- (8) 拙稿「中島敦「名人伝」論——土方久功「パラオの勇者」との比較を中心に」（『全球時代からの人文主義——歴史、文学、植民地教育史研究の環流（田中寛教授古稀・退職記念論集）』（『新世紀人文学論究』第四号 特別記念号）

- 二〇二二年三月)参照。
- (9) 「ノート第四」(前掲『中島敦全集3』所収)二五六～二五七頁。
- (10) 『土方久功著作集』第二卷所収(三二書房、一九九一年四月)。
- (11) 同右。
- (12) 第三次筑摩書房版『中島敦全集1』所収(筑摩書房、二〇〇一年十月)二二二頁。
- (13) 土方久功「パラオの勇者」(『パラオの神話伝説』所収、大和書店、一九四二年十一月)一五四～一五六頁。
- (14) 「パラオ石神並に石製遺物報告」(前掲『土方久功著作集』第二卷所収)三六頁。
- (15) 「過去に於けるパラオ人の宗教と信仰」(前掲『土方久功著作集』第二卷所収)二二八頁。
- (16) 註(14)に同じ。六頁。
- (17) 同右、七頁。
- (18) 「ノート第五」(前掲『中島敦全集3』所収)二七〇頁。
- (19) 註(14)に同じ。六一頁。
- (20) 同右、一一五頁。
- (21) 註(15)に同じ。二〇四頁。
- (22) 同右、二〇五頁。
- (23) 「四おとぎの国の倫理学」(以下「四」と略す。前掲『正統とは何か』所収)九五頁。
- (24) 「二脳病院からの出発」(以下「二」と略す。前掲『正統とは何か』所収)三九～四〇頁。
- (25) 拙著『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』(おうふう、二〇一六年九月)参照。
- (26) 註(15)に同じ。二〇七頁。
- (27) 佐々木充「南島譚」三篇「光と闇」、「幸福」―「三つの世界」(『中島敦の文学』〈近代の文学・10巻〉所収、桜楓社、一九七三年六月)、大西雄二郎「中島敦の側面」(『ツシタラ3』〈『中島敦全集』第二卷月報〉所収、文治堂書店、一九六〇年六月印刷)など。
- (28) 木村一信「山月記」論―(滅び)への恐れ」(『中島敦論』所収、双文社出版、一九八六年二月)一二九頁。
- (29) 「人虎伝」(国民文庫刊行会編『国訳漢文大成』〈文学部第十二卷晋唐小説〉所収、国民文庫刊行会、一九二〇年十二月)四九九頁。
- (30) 註(23)に同じ。七八頁。
- (31) 「十章 ステイヴンソンのモラル」(以下「十」と略す。前掲『G・K・チェスタトン著作集』〈評伝篇〉5 ロバート・ルイス・ステイヴンソン所収)一六七頁。
- (32) 木村一信「山月記」再説―自己批判・自己否定を試みる物語」(前掲『中島敦論』所収)一九三頁。
- (33) 拙稿「中島敦「山月記」木乃伊」ほか典拠考―G・K・チェスタトンの影響をめぐって」(『別府大学国語国文学』第六十四号、二〇二三年三月)参照。
- (34) 「金の十字架の呪ひ」(チェスタトン著/直木三十五訳『ブラウン奇譚』〈世界探偵小説全集〉第九卷所収、平凡社、一九三〇年三月)三〇二頁。
- (35) 武下(赤羽)智子「中島敦「幸福」論―フィクションとしての南洋」(『名古屋自由学院短期大学研究紀要』第三十三号、二〇〇一年三月)二五頁。
- (36) 「附」パラオに於ける信仰的新結社に就いて」(過去に於けるパラオ人の宗教と信仰)末尾、前掲『土方久功著作集』第二卷所収)二五六頁。
- (37) 同右、二五九～二六〇頁。
- (38) 同右、二三八頁。
- (39) 同右、二四三頁。
- (40) 同右、二四四頁。
- (41) 天野真美「中島敦「幸福」論」(『学術研究―国語・国文学編』(早稲田大学教育学部)第四十三号、一九九五年二月)七四頁。
- (42) 永井博「主人と奴隷の逆転が意味するもの―中島敦「幸福」論」(『四日市大学論集』第二十三卷第二号、二〇一一年三月)一三三頁。
- (43) 山本真也子「中島敦「幸福」論―自足された南洋の幸福」(『武蔵野大学大学院 言語文化研究科・人間社会研究科 研究紀要』第一号、二〇一一年三月)一〇二頁。
- (44) 「サテワヌ島民話」(『土方久功著作集』第五卷所収、三二書房、一九九一年十月)三六三頁。